

第四章 一生の儀礼

一、誕生と年祝い

1、出産とおぼたて うぶ屋というような別棟の産室のあったことは聞かないが、納戸のような薄暗い部屋を産室として、もう座産ということも忘れてしまったようで、くずぶとんなどを敷いて、産屋のねべや、即ち巣をつくる。

産の忌は死火より強いとはどうしたことであろうか。二十一日の枕引き頃までは、産婦の食べ物は別火で炊いた。

初産は必ず実家に戻つてするものという慣行も、殆ど崩れないで残っている。

現在のように、単に近所からのとりあげ婆さんにまかせるのではなく、免許をもつ産婆があり、医術が進んで、時には病院での出産もあるくらいであるから、あまり産婦も出産に恐怖を感じるということもなくなったが、産婦はまず閑戸のおんば様に参つておくとか、昔の十九夜講、二十三夜講、子安講なども、お産の難渋な時代に、神仏に祈願して、ひとえに安産を願つたことの名残のようみえる。

農婦はお産間近かまで過労な仕事をつづけるから、難産も多く、文化・文政頃の十九夜講、二十三夜講の供養碑の目立つて多いこと、子安観音、如意輪観音の信仰が厚かったこともそれを裏付けているかにみえる。医術に頼ることはよいことであるが、出産に対する敬虔さが失われ始めていることは、一生の儀礼から、決して進歩ではないようである。